

## はじめに

ひとくちに登山といっても、日本の場合ハイキングからクライミングまでを含んだ幅広い意味を持っている。つまり、宗教登山に始まり講という形で大衆化された巡礼、漂泊、旅といった伝統、遊山の風習に山をスポーツの対象とするヨーロッパの考え方まで含んだものだ。穏やかな里山を歩いてヒマラヤの壁を登っても同じ登山という言葉で表される。しばしば登山の大きな楽しみが豪華な飲食とされるのは、遊山の伝統であろう。欧米の山はクライマーの領域とバックパッカー、ハイカーの領域は地形的にも分離しているのに対して、日本ではどちらにとっても中途半端な存在である。

アメリカで登山の本といえば、その内容はクライミングと氷雪技術が中心になり、バックパッキング、ハイキングの本の内容は細かな野外生活用品の選択と生活技術が中心となり、それらはほぼはっきり分かれそれぞれの専門家によって執筆されている。コリン・フレッチャーは4月の富士山を登っており、どこまでがバックパッキング、ハイキングの領域か正確には分からないが、ジェフ・ローは絶対その種の本は書かないだろう。

日本でハイキングといえば日帰りや郊外や里山を歩いたり登ったりすることを表す。しかしアメリカでは野山を歩いたり旅することを意味し、数千kmの長さのトレイルを1シーズンで歩き通す人(スルーハイカー)も珍しくない。88年には日本人の女性が、アパラチアトレイルを166日かけてスルーハイクしている(高村哲、「3000kmを166日間で踏破」、『岳人』、92年2月号、104頁)。バックパッキングは本来バックパック(フレームバック)に生活用品を入れハイキングすること。どちらも普通山頂は踏まず、山懐を辿ることから砂漠までを対象とし山頂にはこだわらない。そこが山頂から山頂へ尾根伝いに歩く縦走、山歩きと異なるところだ。夏の日本アルプスの縦走登山を英語では"hiking"と表現する。多くの日本の登山者は"climber"とも"mountaineer"ともいえない。

日本では、クライミングの本はクライマーが書くのは当然だが、歩き登山の本は歩き登山に熟達していない登山家を書くことが多い。山歩きは、スキーやクライミングのようなはっきりした技術はなく、せいぜい生活技術が必要なくらいだからだ。取り立てて必要な技術がないから、自分史同様、誰でもそれなりに書くことができると考えられているのも一因だ。

生活技術は人により千差万別。だから、生活技術とその道具選びは自らの思想を客観化し

て表現しないと、コーヒーもおいしい、紅茶もおいしい、ココアもおいしいといった止めどもない事実と感情の羅列に終わってしまう。あるいは、私はコーヒー党だといった嗜好を押しつけ、一過性のブームとして消費されるだけだ。「学びて思わざれば則ちらく、思いて学ばざれば則ち殆し」。

アイスクライミングにおけるダブルアックス用ギア類、クライミングのフラットソールに匹敵する山歩ききの道具、装備の革新は、ナイロンとゴアテックスの発明になるうか。合成繊維やゴアテックスなしの登山は想像することもできない。しかし、それらが一般化した今では、人間のパフォーマンスを劇的に向上させるものは何一つなく、微に入り細に渡る枝葉末節にこだわる安定期に入っている。

画期的とか、進歩したとか表現しなければ消費者の購買欲は喚起できない。登山者はお金で能力を買えると錯覚する。夢を買って勇気付けられる。ところが、ポリプロとキャブリーンとジオラインとクールマックスのアンダーウェアも、ゴアテックスの第二世代とXCRの両具も、ユニクロとポーラーテックのフリースジャケットも、実用上の違いは全くといって良いほど感じられない。その使用環境の変化の大きさの前に、多少の性能差は完全に見えなくなる。大変革期はとうに過ぎ成熟期も越えつつある現在では、多くの製品のクオリティーが底上げされどれをとっても相当なレベルに達しているからだ。

それ故、差別的に極論すればブードゥー科学の言説がまかり通る。しばしば単純な一般化、無知や博識による思い込みが論理的に説かれ、観念的空論が繰り返し発表されるのは不気味としか表現できない。近年、教育界で話題になっている「もの離れ」とそれに伴う「理科離れ」の当然の帰結なのだろうか。あるいは「生活体験不足」のため、現実から遊離した奇妙な論理を真実と思い込んでしまったためなのだろうか。もちろん一つのジョークとして考えれば面白いお話になっている。しかし、その同じ一つの本や雑誌の中にも真っ当な情報が多く含まれることにより、登山者は論理的判断能力を攪乱させられることが問題だ。東京スポーツに載るべき記事が、東京新聞に掲載されたみたいなのだろう。そこに、少なくとも中学校理科レベルの論理性で全体像を構築、明確に示す困難さと必要がある。理論的であれば間違いは発見し易く、より良いものへの礎とすることが可能だ。オープンソースであれば、誰でも自らの必要に応じカスタマイズして使って楽しめる。

縦走は日本の登山の典型的ジャンルである。日本の山ではフレームバックがほぼ全滅したように、バックパッキングに向いた地形ではない。平坦なところは全て開発し尽くされバックパ

ッカーの対象とはなりにくい。日本登山の一番の魅力は縦走だと岩崎元郎はいう(「日本の登山のいちばんの魅力というのは縦走」、『山と溪谷』、96年1月号、199頁。「日本の山は縦走登山が一番」、『岳人』、03年7月号、27頁)。夏も冬もそれができる適当な規模、険しさ、気象状況の山は日本以外にはなさそうだ。日本独自と思われていた沢登りは、海外での記録をしばしば見る。海外の雑誌に取り上げられたこともある。日本の登山の中で一番身分の高いものはクライミング、二番は沢登り、三番は縦走、四番はハイキングといった序列がありそうだ。フリークライミングは純粋なスポーツで番外、雪山はそれぞれのスパイス的役割を持っている。クライミングができれば沢登りはできるが、逆は真ならずで上位のものは下位のものを含んでいると考えられている。しかし縦走という歩き登山をスマートに行うためには、アメリカのようにそれなりの洗練された道具立て、技術が必要ではなからうか。登山道で見かける多くの縦走者やクライマーは長距離を歩き慣れているようには見えない。

この本では、縦走つまりほとんど生活技術以外何らの技術も必要としない登山について書いている。もちろん、飲食が楽しみを中心でない、山小屋の食事に頼らない山行だ。山小屋で雨露しのげ、寝ることが出来れば生活技術さえ不要なのは自明だろう。日本の山は小さいので、夏に一つや二つの山を縦走(あるいはピ-クハント)するくらいなら、多少の体力だけで何の生活技術も道具も必要としない。学校の遠足(集団登山)が行われるくらいだから当たり前だ。つまり長期テント縦走になって、初めて生活技術や専門の道具が必要になり、それらを論ずる事が可能となる。縦走は基本的にロープ不要の山登り、山歩きだ。残念ながら日本の山は全て本格的クライミング技術なしで山頂に立つことができる。

テント山行でさえ、10日くらいであれば好天に恵まれ、これまた殆ど生活技術さえ必要ないことがある。多少の悪天や困難は、短期であれば勢いで乗り切れてしまう。何らアウトドアの経験や技術がない普通の人で、基地さえ完備していれば、南極越冬隊員として活躍できる。その様に、食住の保証された山歩きに殆ど技術などありようがない。

ところで、ノンデポ、ノンサポート厳冬期南アルプス全山縦走や無雪期南アルプス全山往復縦走でやっと、生活技術が必要な長期縦走といえるくらいだろう。その程度の距離と地形であると、体力を温存して故障無く歩くノウハウ、悪天にも恵まれるので生活技術とそれを支える装備を本気で吟味する気になる。もちろん、やる気だけで数回くらいは誰でも簡単に出来ることだが、装備や生活技術を抽象化して表現するにはデータ不足で、精神論以外には気の利いたことは書けそうもない。

それはアメリカのトレールを数ヶ月かけてのスルーハイクと比べ時間的、距離的には長期とは

いえないものの、気象の厳しさ、変化の大きさ、急峻な地形、道の悪さとノンデポ、ノンサポートといった点を鑑み全く別のジャンルと考えられるのでそれらを「長期」といってもよいはずだ。アメリカのロングトレールの記録、ガイドブック、ビデオ等を見ると、江戸時代に中山道や東海道を旅することに近いのではと思うくらいだ。四国八十八ヶ所の「お接待」の様なことが行われていることでも明らかだろう。

短い山行を何度重ねても山歩きで使うような装備、食料等の評価は難しい。基本的に好みの問題にすぎないからだ。山行毎にそれらを変化させれば、それぞれの新奇性だけに心を奪われそれらの変化を感じるだけだ。毎回同じものにしても、一度の山行で全てが体とじっくりなじみ理解できる状態にならず、山行毎に感覚がリセットされそのもの自体の評価はできない。長期連続使用しなければ評価、判断できない。しかし、山での使用環境、状況は大きく異なるので、何かを客観的に評価しようにも再現性が乏しく難しい。唯一、検証性を高めるためには長期山行を何度も愚直に重ねることだけだ。そのために行ってきたわけではないが、南アルプス長期縦走を何十回も行ってきたことにより、基本的捉え方だけは明確になってきた。実働10日位までの短期山行の人には、極端でトリビア的知識の集大成と言われるかもしれないが、基本的考えと基礎的データだけは参考にして欲しい。また、多人数で山に登れば自然を味わう前に人間関係を楽しむことになってしまう。全て単独あるいは2人パーティーまでの行動を前提にしている。

アメリカのバックパックやハイキングの領域より急峻、道が悪く、天候が不安定、そして冬期でさえ普通に行われる活動、縦走を本格的に解説した本はない。縦走は生活技術以外ほとんど何の技術も必要なく、まして短期であれば生活技術の必要もなく、その方法は好み以外の何者でもないから論理的、体系的表現をすることが難しい。実際、長期縦走を語れるほどの経験、知識と見識を持っている人がいるかさえ怪しいと思っている。

コリン・フレッチャーを代表とする70年代型、重厚長大トラディショナル・バックパッキングは物欲を満たしてくれるが、それはエレファントであってもエレガントではない。その方法での長期縦走はマゾヒスティックな「強力」に任せたい。(Colin Fletcher & Chip Rawlins,"The Complete Walker", Alfred A. Knopf,02)

そのアンチテーゼたるレイ・ジャーダインの超軽量、超長距離、快速ハイキングの方法"Ray-Way"は参考になるものの日本の山岳地帯には適用できそうもない。これは精神的エレメントとして多くの共通点はあるが、縦走をエレガントに行うための十分条件を満たしていない。(Ray Jardine,"Beyond Backpacking",AdventureLore Press,00)

レイ・ジャーダインはこれまでとは全く異なる、装備、衣類と生活技術の組み合わせにより、新しいバックパッキングの楽しさを発明した。フレンズを開発したのも彼だ。もちろん、旧来の方法も確かに良くできている。うまくできた装備群を買って揃えることも、使うことも楽しいし、充実感もある。それは完結した一つのライフスタイルだ。しかし、ある枠内における選択の自由が保証されただけのお仕着せで、結局大きな手の平の上にいるかのような閉塞感を感じさせることもある。本当の技術革新はここ四半世紀ないので、新奇性による面白みも減少している。「私作人、僕食べる人」的分業は現代文明を高度でより快適なものにしたが、生きていくといった充足感を阻害する嫌いもある。それに対するのが"Ray-Way"だ。これまででない道具を自作して、新しい価値観と生活技術で新たなバックパッキングの楽しみを創造した。一つのライフスタイルの提案と言ってもよい。

今や装備のシンプル化、軽量化は、98年設立されたGoLite社の製品を始め、一つの大きな流れとなっている。なおGoLite社は、03年一杯でレイ・ジャーダインとの関係は切れ、"Ray-Way"とは表示しなくなっている。魅力的な商品にするために、本来の潔いほどのシンプルさは失われ、どんどん手の込んだ立派なものになりつつある。"Ray-Way"は、自らの思想に基づいた新たな楽しみを、使う道具さえ自分で作って実践するという主体的、自主的な考えだから、たとえシンプル、軽量な装備、衣類が広く販売される様になっても、それらを手に入れ使うだけでは色合いが相当異なったものにならざるを得ないし、面白くないではないか。

上記、重厚短小、軽薄長大、両極端な方法どちらも、いわゆるスポーツとしての技能ではなく、生活方法とそれを支える道具立てを細々と解説した一種のライフスタイルの提案だ。人の生活の充足感は、生き方の表明、つまり採用する哲学により大きく異なる。このように大して高いスキルの必要ない分野では、技術ではなく思想が、行動とそこから得られる満足感を決定する。しかし、それら両極端の方法どちらも、日本の悪天候"the elements"に対応出来るライフスタイルでないことは明らかだ。日本の山歩きもスポーツとして書くべき技術は殆どないが、低いスキルしか求められない故、ライフスタイル、独自の精神性が満足感の大きさを決定する。

多くの山歩きの本、雑誌やネット上の情報とおり忠実に実行しようとするれば、とても長期の範疇に入らない夏の南アルプス全山縦走でも非常に大げさなことになる。それではせっかくの日本オリジナル長期「縦走」登山を思う存分楽しめない。欧米の登山用品は、その地形と同様クライミング向けとバックパッキング、ハイキング向けにはっきり二分され、縦走向きに作られたものではない。しかし日本でも、あまりにうまくできたそれらのシステム化された装備の魅力と情報に拘泥され、本格的縦走登山に向く装備や方法の全体的提案は殆どない。日本の登山人口の殆ど、超高年者に阿るものが多すぎる。

山の本は、戦前から続いていた貴族的香りはほぼ消滅し、中高年のお手軽健康散歩のための装備、衣類、食料をカタログ的に貼り付け、情緒的に書き連ねた物ばかりだ。新しい装備、道具により、過去を全く切り捨て新たなスポーツとしての体系を作りつつあるクライミングの本との大きな相違である。もちろん、先記した如く、特に短期、実働 10 日程度までのテント山行では何を選んででも全く問題ないことが殆どであり、きちんと比較するような闘争的、ストレスの多い仕事に係わろうという殊勝な人はいないし、必要もない。浮世離れた極楽とんぼの住めるような、のんびりした世の中でもない。下手に評価して責任を取らされる危険を冒すより、ホンワカした雰囲気を与え、仲間の中で楽しく生きることに専念するのが無難だ。それで、今でも縦走登山は、フラットソールをを使いつつ、埋め込みボルトが連打されたルートをあぶみ掛け替えの繰り返しでクライミングするが如しの様相を呈している。そこで、日本の山岳を全天候的に安全確実に縦走するための生活技術、装備や食料等を明らかにして、多くの人に自立して山を歩く楽しさを共有して頂けたらと考えた。

日本のアウトドア 1000 億円(出荷)市場はここ 10 年ほぼマイナス成長。今だ日本にはクラシックと呼べる歩き登山の本はなく、先人の蓄積を批判的に分析して新たな一步を築くような地道な作業は敬遠される。登山の本は数年毎に類似のものが書き飛ばされ出版される。しかし、多くの人が真空から自由に議論を展開して、スクラップアンドビルドが繰り返されるだけだから、バラック住まいのまま何時までも登山の質は上がらない、知的ストックは増えない、若者にとって魅力がなくなる。「由らしむべし知らしむべからず」精神では、登山をますます時代から遠ざけるだけだ。山小屋、登山用品業界、山岳ジャーナリズムの談合馴れ合い利権トライアングルが、若い登山者激減という形で日本の登山を空洞化させた大きな要因かも知れない。

長期縦走の本における唯一のテーマは、何をどれだけ着て食べればよいかといった生活技術の細々としたことだ。人には様々な生活があるのと同様、そこには千差万別の解がある。どの生活がよいということはできない。しかし、自分が主体的に選んだものと満足しない限り、いつまでも飢餓感はいやされないだろう。

そして、たとえ一つの解であっても原理原則さえ明確に提示すれば、それを誰でもよりよき自分の山行のための叩き台として利用できるはずだ。自分オリジナル、カスタムメイド化の参考にはなる。少なくとも、つまらない神話や妄言から自由になって、主体的で気持ちよい登山をする一助にはなるだろう。非常に具体的に装備、歩き方、食料のことを書いても全てを表現し尽くすことはできないが、「知るを知るとなし知らざるを知らざるとなす、是知るなり」、ある選択に至

る判断基準、根拠こそ、絶え間なく変化し数限りない商品の紹介以上に普遍性のある重要な情報だと信じている。

この本は最初、自らの厳冬期南アルプス全山縦走の道具立てを伝えんがために書き始め、大幅な改訂を毎年繰り返して今回 10 冊目になったものだ。「どうも一般ピープルには、僕の登攀がたいしたことではないと思われているフシがあるんです。それが悔しい(笑)。そこで一般人に分かるレベルの南アルプス、厳冬期全山縦走を 80 時間でやりたい(山野井泰史、「マカール西壁単独登攀めざし南アルプス 80 時間縦走」、『岳人』、96 年 2 月号、58 頁)。もっともだ。50 年前には大したことだったかも知れないが、一般登山者のイメージはそこに留まり、現代の高いレベルの登攀は想像力を越えている。しかし、山野井泰史とは逆に、厳冬期南アルプス全山縦走を数回しただけで大した者と思われては、どうも落ち着かない。居心地が悪い。そこで、恥ずかしくも手の内を明かして楽になりたいと思って書き出したという訳だ。

それ故、これを書くために新たな装備、道具や衣類を積極的に購入してチェックすることもなく、多少カタログで調べただけの、自らの装備、道具とノウハウに関する備忘録的なものになっている。現状の登山の道具全体を概観するような面倒な作業もしていない。それらは別の本や雑誌に任せることにした。目的が目的だから、一般の本に書かれているような基本的知識、技術、例えばクライミング、読図、気象等々についても言及せず、扱う内容は非常に限定的にした。この本は初心者を対象に書き始めたものではないからだ。しかし、「針の穴から天を覗く」が如き自己満足の世界に入ることを出来るだけ避けるため、材料、素材の性格を明らかにすることから論を進めることにはこだわった。残念だが、自らのライフスタイルを提案出来るほど独自の内容と表現能力があるはずもなく、それ以外に書く術がなかった。もちろん、それだけでは三流の材料学の本になってしまう。それらが実際の登山にどのような関係があり影響するか、これまで数十回の長期縦走での経験と細かなデータから検討し、空論に陥らないようにしたつもりだ。ささやかなオリジナリティーになっていれればと思う。つまり、これは長期縦走についての基本的問題について、自らの考えを述べただけのものだ。普通の山行には極端、不要で無駄な知識と捉えられるかも知れないが、それゆえ原理主義的普遍性が得られた一面もあると信じている。怠惰、浅学非才故 "the science of 縦走" として、体系的に詳細な全体像を描いているものではない。否、その力もないこと、ご容赦願いたい。

言うまでもないが我々がよいとって選んだ物あるいは方法も、それは全ての中で一番よいのではなく、ある判断基準や根拠とその時の偶然で選ばれたものにすぎない。悪いといった物

も方法も、その時の判断基準と移ろいやすい好みによる偶然の産物だ。以前は大変嫌っていたものでも、ある時から突然好きになるといった心の揺らぎを経験することは珍しいことではない。食わず嫌いは言うまでもない。

生活技術ゆえ各項目は互いに関連し相互作用している上、装備や道具の説明と生活技術が渾然一体となっている。それぞれは独立とはいえないので、全体に目を通して各項目だけで完結させて判断することなく全体として捉えて欲しい。多くのデータは実測値だが、改造を加えた後のためオリジナルの重量ではないものもある。特に、繊維製品は同じものでさえロット等により大きな誤差があるので、厳密に捉えるのではなく、定性的にその大まかな傾向を表すものと考えて欲しい。

なお、単位は国際単位系"SI"ではなく、重量と質量を混同しやすい欠点はあるが、全て生活体験的に分かりやすい工学単位系に換算して表記した。"SI"単位には、例えばN(ニュートン)、Pa(パスカル)があり、それらに相当する工学単位はkgf(キログラム重)、kgf/mm<sup>2</sup>(キログラム重、毎、平方ミリメートル)である。

最後に、大まかに素材別、そして物性を中心として『目次』の各項の表面に現れない内容の一部を、変則的ではあるが『内容案内』としてまとめた。『目次』と『内容案内』の双方をチェックすることにより、必要な情報を多少でも簡単に見つけることが出来ればと思う。不十分な点、重複事項はご容赦の程。『目次』と『内容紹介』は、『はじめに』の前、本書の一番最初にある。

「自然(生まれつき)の理性だけを全く純粹に働かせる人たちのほうが、古い書物だけしか信じられない人たちよりも、いっそう正しくわたくしの意見を判断してくれると期待する」(デカルト、『方法序説』、谷川多佳子訳、岩波文庫、97年、101 ~ 102 頁)。

山姥(Y)とその仲間(N)

増補注:2007年5月記、\_\_部のみ2009年4月追加。